第 19 回山階芳麿賞記念シンポジウム

「子を他人に預ける鳥、カッコウ類研究の最前線」

平成 28 年 9 月 24 日（土）　13：30 ～ 16：00
東京大学農学部　弥生講堂

主催　公益財団法人 山階鳥類研究所
共催　朝日新聞社　　後援　我孫子市

目　次

プログラム ―― 2

山階芳麿賞記念シンポジウムにあたって ―― 3
（公財）山階鳥類研究所 総裁　秋篠宮文仁

第 19 回山階芳麿賞 贈呈理由
山階芳麿賞選考委員長 ／（公財）山階鳥類研究所 所長　林　良博 ―― 4

受賞者の略歴 ―― 5

「山階芳麿賞を受賞して」 ―― 6
立教大学名誉教授　上田恵介

托卵（たくらん）研究はどこまで進んだか？欧米の研究、日本の研究 ―― 7
立教大学名誉教授　上田恵介

仮親を騙す“分身”の術～ジュウイチ雛の妙技～ ―― 8
慶應義塾大学文学部　田中啓太

南太平洋の托卵をめぐる攻防
～日本の鳥にはないセンニョムシクイの対抗策 ―― 9
認定 NPO 法人バードリサーチ　佐藤　望

山階芳麿賞とは ―― 10

山階鳥類研究所の紹介 ―― 11

ご支援のお願い ―― 12

プログラム

開会

ごあいさつ　（公財）山階鳥類研究所 理事長　壬生基博

ごあいさつ　朝日新聞社 ブランド推進担当　千葉光宏

贈呈理由　山階芳麿賞選考委員長　/（公財）山階鳥類研究所 所長　林 良博

シンポジウム
「子を他人に預ける鳥、カッコウ類研究の最前線」

■講演■

●托卵（たくらん）研究はどこまで進んだか？欧米の研究、日本の研究
立教大学名誉教授　上田恵介

●仮親を騙す“分身”の術　～ジュウイチ雛の妙技～
慶應義塾大学文学部　田中啓太

●南太平洋の托卵の攻防　～日本の鳥にはないセンニョムシクイの対抗策
認定 NPO 法人バードリサーチ　佐藤　望

（休憩）

■質疑応答■
上田恵介・田中啓太・佐藤 望

閉会

司会
（公財）山階鳥類研究所 広報主任　平岡　考

山階芳麿賞記念シンポジウムにあたって

（公財）山階鳥類研究所　総裁
秋篠宮文仁

公益財団法人山階鳥類研究所は、1992 年に財団設立から 50 周年を迎えました。その記念の年にあたり、創立者である山階芳麿の名を冠した「山階芳麿賞」を創設し、鳥学ならびに鳥類保護に顕著な功績があった方を表彰することにいたしました。

本年、第 19 回の山階芳麿賞は、立教大学名誉教授の上田恵介博士にお贈りすることになり、去る 7 月 13 日に贈呈式が行われました。受賞された上田博士に心からお祝いを申し上げます。

上田博士は、鳥類の行動生態学の分野において、さまざまなテーマで業績をあげておられます。また、関東一円の研究者や研究者志望の学生、熱心なアマチュアを対象としたセミナー「鳥ゼミ」を 26 年間で 200 回以上主催されるなど、若手の育成にも力を注いでこられました。さらに 2014 年、日本で初めて開催された「国際鳥類学会議」の開催にあたっては、招致委員長ならびに実行委員長として、中心的な役割を果たされました。

本日は上田博士への山階芳麿賞贈呈を記念して、シンポジウム『子を他人に預ける鳥、カッコウ類研究の最前線』を開催いたします。他の鳥に子育てをさせる「托卵（たくらん）」という習性を持つカッコウ類に焦点を当てたシンポジウムで、近年における上田博士の研究テーマのひとつです。托卵する鳥とされる鳥の攻防に、「進化」とはどのようなものなのかを知る重要な鍵があると考えられる最先端の話題です。本シンポジウムにおいては、そのような誠に興味深い研究について、わかりやすく紹介していただきます。このひととき、皆様にお楽しみいただければ主催者として大変嬉しく思います。

終わりに、上田博士ならびに博士の薫陶を受けられた方々のご研究が今後ますます発展し、一層の活躍をされますことを祈念し、私の挨拶といたします。

第 19 回山階芳麿賞 贈呈理由

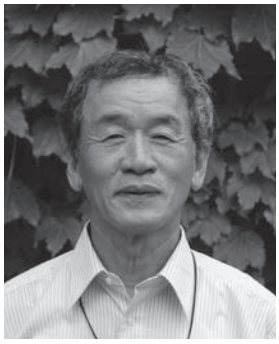
山階芳麿賞選考委員長
（公財） 山階鳥類研究所　所長
林 良博

上田恵介氏は、鳥類の行動生態学の分野の多岐に亘るテーマで、野外観察や野外実験などのフィールドワークを中心とした研究を行い、顕著な業績を収めました。採餌生態や繁殖生態の研究として、一夫多妻のセッカを対象とした繁殖システムの研究を手始めに、オーストラリアの鳥類も含む 20 種余りについて研究を行いました。鳥と他の生物の間の相互関係に着目した研究として、ムクドリやカラス類などの種子散布、メジロの吸蜜・盗蜜行動といった鳥と植物の共進化、ジュウイチ、アカメテリカッコウなどのカッコウ科鳥類を対象とした托卵鳥と宿主の共進化の研究も行っています。特にカッコウ科鳥類と宿主との共進化についての研究成果は、重要な新知見として “Science” や “Biology Letters” (Royal Society) など科学分野の一流誌にとりあげられました。さらに生物地理学と分類学にかかわるものとしてメボソムシクイ種群の地理的変異と分類に取り組んだほか、近年では鳥類の巣に共生する昆虫類、福島県の鳥類相と空間放射線量との関係などの研究にも取り組んでいます。

上田氏の貢献として若手の育成も重要なものです。上田氏は 2002 年から 10 年近くにわたって江口和洋氏と共にオーストラリア熱帯モンスーン林で協同繁殖鳥を中心に生活史研究を行ない、参加した学生やアマチュアを含め 30 余名の日本人若手研究者に、野外調査を経験しながらトレーニングする場を提供しました。 さらに、鳥類研究のセミナー「鳥ゼミ」を 26 年間、200 回以上にわたって主催し、主として関東圏の研究者や鳥に興味を持つ一般の人々が毎月のように集まり、国内外の研究の現状を知り、互いに切磋琢磨しあう場となりました。 普及啓発の分野においては、多くの知見を紹介しオリジナルな論考を含む科学的に価値の高い一般書をいくつも著しています。 2014 年に立教大学で開催された国際鳥類学会議の日本開催にあたっては、招致委員長ならびに実行委員長として招致と実施、運営に尽力し、日本の鳥学と鳥類保全が世界に深く認知される機会を提供し、日本と世界の鳥学の活性化に寄与しました。

山階芳麿賞選考委員会は、これら、多岐にわたる研究から後進の育成、普及啓発にいたる幅広い功績が山階芳麿賞にふさわしいものと判断し、第 19 回山階芳麿賞を上田恵介氏に贈呈することにいたしました。 なお、上田氏には山階芳麿賞の選考委員をお願いしていますが、今回、上田氏を推薦する応募書類が届き賞の候補者になりましたので、今回の選考は上田氏に出席を遠慮していただいて行ったことを付記いたします。

受賞者の略歴



上田恵介（うえだ けいすけ）

【生年月日】1950 年 12 月 1 日 大阪府枚方市生まれ
【専門】行動生態学・動物行動学・進化生態学
【学歴・職歴】
1973 年　大阪府立大学農学部卒業
1977 年　大阪府立大学大学院農学研究科 修士課程修了 農学修士
1985 年　大阪市立大学大学院理学研究科 後期博士課程修了 理学博士
　　日本学術振興会 奨励研究員
1989 年　立教大学一般教育部自然科学科 助教授
1995 年　同大学理学部 総合科学講座 助教授
1997 年　同大学理学部化学科 助教授
2001 年　同大学理学部化学科 教授
2002 年　同大学理学部生命理学科 教授
2016 年　同大学理学部生命理学科 名誉教授
　　日本野鳥の会副会長

【主な著書】『行動生態学を学ぶ人に』（共訳・蒼樹書房・1984）◆『一夫一妻の神話－鳥の結婚社会学－』（蒼樹書房・1987）◆『鳥はなぜ集まる？－群れの行動生態学－』（東京化学同人・1989）◆『♂・♀のはなし－鳥－』（技報堂・1993）◆『擬態－だましあいの進化論－Ⅰ・Ⅱ』（編著・築地書館・1999）◆『種子散布－助け合いの進化論－Ⅰ・Ⅱ』（編著・築地書館・1999）◆『花・鳥・虫のしがらみ進化論－「共進化」を考える－』（築地書館・1995）◆『小学館の図鑑 NEO 鳥』（共著・小学館・2002）◆『行動生物学辞典』（共編・東京化学同人・2013）

【主な学会・社会活動】日本野鳥の会評議員（2004 ～ 現在）、日本動物行動学会会長（2007 ～ 2010）、日本学術会議特任連携会員（2010 ～ 2013）、第 26 回国際鳥類学会議大会会長（2010 ～ 2014）、山階鳥類研究所客員研究員（2011 ～ 2012）、山階鳥類研究所特任研究員（2012 ～現在）、日本鳥学会会長（2014 ～ 2015）

「山階芳麿賞を受賞して」

立教大学名誉教授
上田恵介

この度、山階芳麿賞を頂き、鳥類学者として身に余る光栄です。山階芳麿博士は、戦前、戦後を通じて、日本を代表する鳥類学者で、私財を投じて渋谷区南平台に山階鳥類研究所を開設されたことで知られていますが、その研究の内容においても、大きく日本の鳥類学の発展に尽くされた、私の尊敬する鳥類学者です。また過去の受賞者には、私の師である山岸哲博士をはじめ、多くのすばらしい先輩研究者の方々が並んでいます。その末席に加えていただき、正直、面映いところもありますが、これでやっと一人前の鳥類学者として認めて頂いたかなと喜んでおります。

私自身の研究を振り返ってみますと、博士課程の大阪市大におけるセッカの配偶システム研究が私の鳥類学の原点です。1980 年代に世界の行動生態学の流れの中心に身を置くことができたことが、研究者としての私を形成してくれました。研究の対象としてはずいぶんいろんな鳥に手を出しました。もともと小鳥が好きなのですが、秋ヶ瀬の湿地環境ではコヨシキリ、オオヨシキリ以外にヨシゴイやバンも調べていました。また富士山でのジュウイチの托卵（たくらん）に関わる研究はオーストラリアやニューカレドニアでのテリカッコウ研究に発展しました。擬態や種子散布という共進化のテーマにもちょっとだけ手を出しました。そんなわけで「上田は何が専門やねん？」と言われそうですが、メインの研究テーマはやっぱり「鳥の社会（配偶）システムの進化」かなと思います。

研究は研究者個人の発想に多くを負う部分もありますが、大切なのはチームワークです。私が立教大学にいた 27 年間、院生やポスドク研究員など、多くの若い研究者が私とチームを組んで、国内・海外のさまざまなフィールドを開拓し、その若く柔軟な発想で新しいテーマを発見し、鳥の生態の解明に一緒になって取り組んでくれたこと、それが私の研究生活の源泉であったし、今回の受賞につながる研究の原点です。

いま改めて、自らの研究生活を振り返り、これまで得てきたものを鳥類学の発展に還元していこうと思っております。

第19回山階芳麿賞記念シンポジウムパンフレットpdf　公益財団法人山階鳥類研究所作成

托卵研究はどこまで進んだか？欧米の研究、日本の研究

立教大学名誉教授
上田恵介

カッコウと言えば、他の鳥の巣に卵を産み、自分のヒナを他人に育てさせる鳥として知られています。この行動を托卵（たくらん）といい、カッコウ科の多くの鳥がこの習性を持っています。カッコウの研究は 200 年以上も昔から行なわれ、その行動や生態についてはいろんなことがわかって来ました。カッコウは托卵研究のモデル生物と言えるでしょう。しかしヨーロッパにはカッコウ 1 種類しかいないので、これまでの托卵行動についての知識はカッコウ 1 種類だけについての偏ったものでした。

けれど日本にはカッコウ以外に 3 種類のカッコウ科の鳥がすんでいます。ホトトギス、ツツドリ、ジュウイチです。これらの種類はどんな托卵行動を進化させているのでしょう。これらの鳥についての研究はこれまでほとんど行なわれていませんでした。理由としてはカッコウが草原性の鳥であるのに対し、ホトトギス、ツツドリ、ジュウイチはおもに森林にすむ鳥で、行動範囲も広く、また托卵された宿主の巣を見つけるのがとても困難な種類だったからです。

カッコウと宿主の関係は緊張をはらんでいます。それは托卵されると宿主は自分の子孫を残せないからです。それゆえ宿主はカッコウの托卵を防ごうとあの手この手の方法を進化させて来ました。その一つが宿主によるカッコウ卵の排除です。しかし宿主が托卵を見破って、托卵された卵を排除する対托卵行動を獲得すると、カッコウは次々と宿主を変更して、宿主の防衛網を突破していきます。両者の間には熾烈な “ 軍拡競争 ” が展開しているのです。

私たちはこのカッコウと宿主の関係を解明するために国内、国外で研究を進めて来ました。たとえばジュウイチ。ジュウイチはコルリやオオルリ、ルリビタキなどの青い鳥に托卵することが知られています。田中啓太さんを中心にしたチームは富士山をフィールドに研究して来ました。その結果、ジュウイチのヒナが宿主を騙して、多くのエサを受け取ろうとする面白い行動が見つかりました。

ところで、カッコウ以外のほとんどのカッコウ科の鳥は熱帯地域に生息しています。カッコウ類の生息の中心、熱帯域にはどんなカッコウ類がいて、何をしているのだろうというのが、次のテーマでした。まずオーストラリアの熱帯地域、そしてニューカレドニアで、佐藤望さんを中心とするチームがテリカッコウ類の研究を行いました。

ジュウイチの研究もテリカッコウ類の研究も、これまでの世界の托卵研究の歴史を大きく書き換える成果をあげました。ここでは世界の托卵研究をリードしつつある、日本における托卵研究を紹介し、托卵という進化的にとても面白い行動の仕組みをお話ししたいと思います。

仮親を騙す“分身”の術～ジュウイチ雛の妙技～

慶應義塾大学文学部
田中啓太

みなさんはジュウイチという鳥をご存知でしょうか。日本をはじめ、中国や韓国、ロシア東部など、東アジアだけに生息するカッコウの仲間です。カッコウは自分では一切子育てをせず、他の鳥の巣に卵を産み込んで孵(かえ)った雛を育てさせる、托卵鳥です。カッコウの仲間ということで、ジュウイチもやはり托卵鳥で、オオルリやルリビタキといった、スズメの仲間の巣に卵を産みこみます。

托卵の標的となり、カッコウやジュウイチの雛を育てるハメになってしまった不運な小鳥たちは、自分の子ではない雛を育てねばなりません。さらに、カッコウやジュウイチの雛は、卵から孵るとすぐ、仮親の本当の子である卵や雛を背中にのせて巣の外に落としてしまいます。つまり、托卵されるということは、どんなに苦労しても自分の子孫を残すチャンスがゼロになってしまうことを意味しています。こんな事態に手を拱(こまぬ)いていては淘汰されてしまうので、托卵の標的となる鳥は、“宿主”と呼ばれますが、なんとか托卵から逃れる方法を進化させます。このような托卵鳥と宿主の進化的攻防は“軍拡競争”型の共進化と呼ばれていますが、これについては次の佐藤さんに話題を譲り、私は托卵鳥の雛が、仮親の本当の子ではないにもかかわらず、どうやって自分を育てさせるよう仮親を仕向けているか、その方法に焦点をあて、とくにジュウイチの雛がどのように仮親を操っているのかを紹介したいと思います。

では、ジュウイチの妙技とはなんでしょうか。どのように分身の術を弄(ろう)しているのでしょうか。その謎を解く鍵は雛の身体的特徴にありました。ジュウイチの雛の翼の裏側には、羽根が生えていません。他の鳥でも卵から孵ったばかりのうちは、雛はほとんど羽根が生えていないのですが、大きく育った雛は全身が羽根や羽毛に覆われており、通常は皮膚が裸出していることはありません。ところが、ジュウイチに限っては大きく育った雛でも翼の裏側には羽毛すら生えておらず、皮膚が露わになっています。そして、その露わになった皮膚は、ジュウイチの雛自身の口の中の皮膚の色と同じ、鮮やかな黄色をしているのです。さらに、ジュウイチの雛は仮親が餌を運んで来ると、翼を大きく持ち上げて揺らし、まるで翼の裏の黄色い部分を誇示するような行動をとります。

このようなジュウイチの特徴をもとに、上田先生と私が解き明かした、ジュウイチの雛の騙し戦略を紹介したいと思います。

南太平洋の托卵をめぐる攻防
～日本の鳥にはないセンニョムシクイの対抗策

認定 NPO 法人バードリサーチ
佐藤　望

小さな体の親鳥が巨大なカッコウの雛に餌を運ぶ姿は古くから多くの人を魅了し、鳥類学者たちはこぞって托卵（たくらん）に関する研究をしてきました。そのおかげで、今日、私たちはカッコウの托卵に関する様々な事実を簡単に調べる事ができますし、実際の映像や写真を見る事もできます。ところが托卵研究は今も熱が冷めていません。現在でも次々と新しい現象が発見され、新しい考え方が出てきています。その一例が、上田研究室が発表したジュウイチの研究です。これまでカッコウの托卵に研究が集中していたため、ジュウイチなど他のカッコウ類では、近年になっても大きな発見が起きています。

今回紹介するテリカッコウも、これまで研究が進んでいなかった種の 1 つで、上田研究室のグループは 2006 年から調査を開始しました。2015 年までにオーストラリア、ニュージーランド、ニューカレドニア、バヌアツなど様々な地域でテリカッコウとその宿主であるセンニョムシクイを調査することで、今まで知られていなかった事が次々と発見されました。その 1 つがセンニョムシクイのヒナ捨て行動です。センニョムシクイはテリカッコウに托卵されると、自分の卵と同様にテリカッコウの卵も温めます。ところがテリカッコウが孵化してヒナになると、センニョムシクイはそのヒナをつまみ出して巣の外に持ち去ります。こうようなヒナ捨て行動は他の種では知られておらず、進化しないと考えられてきたため、大きな反響がありました。また、テリカッコウのヒナはセンニョムシクイのヒナによく似ています。これはテリカッコウのヒナ擬態であると考えられます。

このように、テリカッコウとセンニョムシクイは他のカッコウとその宿主と異なる進化をしてきています。本シンポジウムでは、10 年間の研究成果と今後の展望を述べたいと思います。

山階芳麿賞とは

山階芳麿賞とは

● 山階芳麿賞は、財団創立 50 周年にあたる 1992（平成 4）年に、我が国の鳥類学の発展と保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰するために設けられました。

● 山階鳥類研究所所長を委員長とする本賞選考委員会で贈呈対象者（個人または団体）を選考します（委員会の構成は右下欄を参照）。

● 受賞者には、山階鳥類研究所総裁、秋篠宮文仁親王殿下から表彰状と記念メダルが贈られます。記念メダルは、表に山階芳麿博士の肖像、裏に本研究所が新種記載した沖縄島の固有種、ヤンバルクイナのレリーフをあしらい、受賞者の氏名が受賞年とともに刻印されます。また、第 12 回（2003 年）の受賞者からは、さらに副賞として「朝日新聞社賞」（賞金 50 万円と盾）が贈られることになりました。

● 歴代受賞者

第 1 回 羽田健三†（信州大学名誉教授）、第 2 回 松山資郎†（山階鳥類研究所顧問）、第 3 回 中村司（山梨大学名誉教授）、第 4 回 黒田長久†（山階鳥類研究所所長）、第 5 回 中村登流†（上越教育大学名誉教授）、第 6 回 正富宏之（専修大学北海道短期大学教授）、第 7 回 樋口広芳（東京大学大学院教授）、第 8 回 山岸哲（京都大学大学院教授）、第 9 回 藤巻裕蔵（帯広畜産大学教授）、第 10 回 小城春雄（北海道大学大学院教授）、第 11 回 中村浩志（信州大学教授）、第 12 回 石居進（早稲田大学名誉教授）、第 13 回 由井正敏（岩手県立大学教授）、第 14 回 長谷川博（東邦大学教授）、第 15 回 立川涼（愛媛大学名誉教授）、第 16 回 森岡弘之†（国立科学博物館名誉研究員）、第 17 回 日本イヌワシ研究会、第 18 回 橘川次郎†＊（クイーンズランド大学名誉教授）、小西正一＊（カルフォルニア工科大学名誉教授）　いずれも受賞当時の役職、†故人、＊特別賞

山階芳麿賞のメダル

表：山階芳麿博士の肖像
裏：ヤンバルクイナのレリーフ
受賞年と受賞者の氏名が刻印される

山階芳麿博士

山階芳麿博士は、1900（明治 33）年 7 月 5 日、山階宮菊麿王の第二子として誕生しました。幼い頃から鳥に興味を持ち、陸軍士官学校を経て東京帝国大学（現東京大学）理学部動物学科選科に入学、動物学の基礎を学びました。同選科を 1931（昭和 6）年に修了、1932（昭和 7）年に山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立、鳥類の研究に没頭し、アジア・太平洋地域の鳥類標本の収集にも努めました。1939（昭和 14）年から、北海道帝国大学（現北海道大学）の小熊捍教授の指導で研究を行い、1942（昭和 17）年「鳥類雑種の不妊性に関する研究」で同大学から理学博士号を取得しました。その後、鳥類の染色体の研究に取り組み、染色体を用いる方法を鳥類の分類に導入し、この成果を 1949（昭和 24）年に「細胞学に基づく動物の分類」として出版しました。この研究は、主観的な形態分類に代わる客観的な分類法として国の内外から高く評価され、これにより、翌 1950（昭和 25）年、日本遺伝学会賞を受賞しました。また、研究のみならず鳥類保護にも熱意を注ぎ、日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任しました。1977（昭和 52）年、ノーベル賞受賞者 K. ローレンツ博士などわずか数人に与えられたジャン・デラクール賞を受賞、翌 78（昭和 53）年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第 1 級ゴールデンアーク勲章を受章しました。1989（平成元）年 1 月 28 日没、88 歳。主要著書に『日本の鳥類と其生態』（第 1 巻：1933、第 2 巻：1941）、『世界鳥類和名辞典』（1986）他、論文多数。

山階芳麿賞選考委員の構成

委員長：林良博（（公財）山階鳥類研究所所長）
委員：石居進（早稲田大学名誉教授）、井田徹治（共同通信社科学部編集委員）、上田恵介（立教大学名誉教授）、上田俊英（朝日新聞社編集委員）、岡安直比（（公財）日本モンキーセンター国際保全事業部長 / 京都大学野生動物研究センター特任教授）、尾崎清明（（公財）山階鳥類研究所副所長）、山岸哲（（公財）山階鳥類研究所名誉所長）、若松博幸（（株）ＮＨＫエンタープライズシニア・エグゼクティブ・プロデューサー）、渡辺茂（慶応義塾大学文学部名誉教授）五十音順

山階鳥類研究所の紹介

山階鳥類研究所の歴史と概要

山階鳥類研究所は、山階芳麿博士（1900 － 1989）が 1932（昭和 7）年に私費を投じ、東京渋谷南平台の山階家私邸内に建てた鳥類標本館が前身です。1942（昭和 17）年に文部省（当時）から許可を得て、財団法人として発足しました。第二次大戦の空襲で山階邸が全焼したにもかかわらず研究所は焼失をまぬがれ、博士の収集した貴重な鳥類標本約 2 万点が無傷で残りました。戦後は、研究所の小さな建物に日本鳥学会、日本動物分類学会、日本生物地理学会、日本野鳥の会、日本鳥類保護連盟などの学会や鳥類関係諸団体の事務局が身を寄せ合い再出発しました。

東京渋谷南平台の旧研究所

山階鳥類研究所は戦前戦後を通じて多くの鳥類研究者を育て、数々の業績をあげましたが、建物が老朽化し手狭になったことから、1984（昭和 59）年、千葉県我孫子市高野山の手賀沼畔に移転し、現在に至っています。2012（平成 24）年 4 月、公益法人制度改革に伴い、公益財団法人に移行しました。また 1986（昭和 61）年からは、秋篠宮文仁親王殿下を総裁としてお迎えしています。

千葉県我孫子市の現研究所

現在、山階鳥類研究所は以下の 3 つの部門で構成されています。日本最多の鳥類標本と文献を所蔵する機関として、鳥類全般に関する科学的研究を行うとともに、鳥類学者や鳥類研究を志すアマチュアの方々へも研究の場を提供しています。

自然誌研究室：

所蔵する鳥類標本約 7 万点と図書資料約 4 万点の維持管理、さらなるコレクションの充実を目指した収集および、これら資料のデータベース化を行っています。また、これらの資料を用いた鳥類に関する基礎的なデータの収集や研究も行っています。特に近年では、DNA を用いた鳥類の系統・進化・分類に関する研究や、標本の形態や色彩の情報をデジタル化し、研究に役立てるためのアーカイブ化とそれらを用いた研究に力を入れています。

保全研究室　：

鳥類の渡り経路や寿命の解明、環境の長期的モニタリングなどの視点から環境省委託の鳥類標識調査や海鳥の繁殖状況調査を行うほか、鳥類標識センターとして国内外の調査者の育成、標識データのとりまとめに取り組んでいます。アホウドリの新繁殖地への誘致やヤンバルクイナの生態研究など、希少鳥類の保全のための調査研究を行っています。

事　務　局　：

財団の活動を支えてくださる賛助会員やご寄付の窓口業務、庶務、経理など事務全般を行っています。また、ニュースレターの発行やウェブサイトの作成･更新など、研究所と外部の方々をつなぐ窓口業務を行っています。

理事長、所長を含め人員数は 24 名で、そのうち 18 名の研究員・専門員がそれぞれの部門で研究業務にあたっています。鳥類学専門誌「山階鳥類学雑誌」を年 2 回、ニュースレター「山階鳥研 NEWS」を隔月発行して、鳥類学と地球環境保全の普及啓蒙を行っています。現在、東邦大学大学院、東京農業大学大学院、帝京科学大学大学院と連携大学院協定を結んで、相互に研究協力しています。

ご支援のお願い

山階鳥類研究所は、日本、アジアをはじめとした膨大な数の鳥類標本、図書資料を所蔵し、内外の研究者にその情報を提供してきました。また、鳥類全般の科学的研究により国際的にも評価されており、ヤンバルクイナの新種記載、コウノトリやトキの保護への参画、アホウドリの保護・増殖事業、標識をつけて放鳥することにより鳥の生態や渡りの経路を調べる標識調査など、多くの活動を行っております。私たちはこれらの活動を通じ、生物多様性の維持、地球環境の保全にも貢献しています。

山階鳥類研究所では、このような活動を支えてくださるためのご寄附を随時お受けしているほか、賛助会員を広く募集しております。賛助会員の方には、山階鳥類研究所の活動をお知らせする「山階鳥研 NEWS」（年 6 回発行）や、学術誌「山階鳥類学雑誌」（年 2 回）をお届けし、随時開催するシンポジウムなどのイベントのご案内を差し上げるほか、親睦を図る目的で賛助会員の集いを随時開催しています。

賛助会員の方々から頂戴する賛助会費は、上記のような研究活動や標本・図書資料の収集・維持管理などに使われます。日本の鳥類学の発展と鳥類の保護、そして地球環境の保全をめざす私どもの活動を支えてください。皆様のあたたかいご支援をお願いいたします。

賛助会のご案内

○ 法人賛助会員

（年会費 1 口 5 万円）「山階鳥研 NEWS」と学術雑誌「山階鳥類学雑誌」 をお送りします。

○ 個人賛助会員

（年会費 1 口 1 万円）「山階鳥研 NEWS」もしくは「山階鳥類学雑誌」のいずれかご希望のものをお送りします。

（年会費 1.5 口 1 万 5 千円）「山階鳥研 NEWS」と「山階鳥類学雑誌」の両方をお送りします。

入会をご希望の方はお手数ですが、パンフレット「賛助会員入会のお願い」にあります申込書にご記入の上、はがきを切り取り、切手を貼らずにお送りください。送金には同封の郵便振替用紙（振込手数料無料）をご利用ください。

なお、銀行または郵便局からの口座振替（自動引落し・振込手数料無料）によるお支払いもできます。ご希望の方には申込用紙をお送りしますので、お申し出ください。

法人賛助会員申込書および詳しい資料の請求も下記へご連絡ください。

山階鳥類研究所では、賛助会員のほかにご寄附も募っておりますので、よろしくお願いいたします。

[入会申込み・資料請求の宛先]

〒 270 - 1145　千葉県我孫子市高野山 115　（公財）山階鳥類研究所・事務局
TEL : 04-7182-1101　FAX : 04-7182-1106
E-mail : kaiin@yamashina.or.jp　URL : http://www.yamashina.or.jp

※ 山階鳥類研究所は公益財団法人です。当財団に対する寄附金及び賛助会費は税制上の優遇措置の対象となります。

【三種のカワセミ】
　山階鳥類研究所設立当時に玄関に飾られたステンドグラスです。
　左から旧北区のアカショウビン、東洋区のヤマショウビン、オーストラリア区のシロガシラショウビンで、広くアジアや太平洋産鳥類を研究する目標を表徴したものです。「山階鳥類学雑誌」の表紙や「山階鳥研 NEWS」の題字にも使われており、山階鳥類研究所のシンボルマークとなっています。

第 19 回 山階芳麿賞記念シンポジウム
「子を他人に預ける鳥、カッコウ類研究の最前線」

発行日	2016 年 9 月 24 日
編集・発行	公益財団法人　山階鳥類研究所
	千葉県我孫子市高野山 115
印刷	ＮＥＣマネジメントパートナー（株）